

僕は、先輩を乱暴にフェンスに押しつけると、
両手で腰を強く抑えつけた。
旧校舎の校庭から部活動を
している生徒の声が聞こえてくる。
角度的に上を見られた時点で、
先輩の裸は見えてしまうだろう。
しかし、目の前に広がる非現実的な光景が、
そんな冷静な思考を一瞬で消し去った。

はあ...
はあ

美しくて清楚でみんなに慕われている
生徒会長が、目の前でオマンコから膣液を
垂らしながら、挿入を懇願しているのだ。
この異様な状況に、僕の興奮は最高潮に達する。

はあ
はあ

んん

もじ

ぬん

もじ

もじ

「はやく入れてえ……」

もう我慢できないよお……」

先輩は粘つくような口調で言うと、
つま先立ちをして、膣口を「ちら」に向ける。

僕は、硬く勃起したペニスを望み通りに、
先輩の膣内へ深く突き入れた。

ゴッ
ゴッ

ゲポッ

ゴッ
ゴッ

カッ
カッ



先輩は、既に絶頂に達する寸前だったのか、ペニスを吸い込むように膣口を締め上げると、ピクンと体を一度痙攣させた。

その後は、ペニスを引き抜く度に、透明な液体が、膣口から止めどなく溢れ出てくる状態になる。

恐らく、膣の強い締め付けのせいで、ペニスと膣壁の間に空間が無くなり、行き場を失った愛液が、奥から次々に掻き出されてくるせいだろう。

ペニスを膣から出し入れする度に、誰もいない静かな屋上に、粘液の擦れる音が響く。先輩を見る。何度も連続で絶頂に達しているせいか、口から涎をダラダラと垂らし、僕の支え無しでは、既に立っていられない状態になっているようだ。

ずっぽ

ずっぽ

あ

びく

ピクン

ピクン

びく

ぽ

ぽ

ぽ

ぽ

「もうダメかもお……ひぐううう……!!!」

ぱちゅぱちゅという音を発しながら、
膣口が収縮と弛緩を繰り返す。
お互いの波長が同調しているからなのか、
2人の性器が異様な熱を持っているような気がした。
亀頭が膣壁を削るように押し入り、子宮口にぶつかる。
そのたびに、先輩が言葉にならない声を上げる。

あっ
あっ

R-

IP-

あ
あ

IP-

IP-

あ

あ

はだけた制服に脱げたスカート。
さらけ出された大きな乳房……。
学園内での凜とした姿からは、
想像もできないこの醜態に
僕の興奮は更に高まっていく。

「あつーくっ……！」

まだ猶予があると思っていたが、
ペニスを後ろに引いたタイミングで
射精が始まってしまった。

自分でもびっくりするような硬さで
反り返ったペニスは、勢いよく先輩の
膣口から外に飛び出し、意志を持っている
かのように周囲へ精液をまき散らした。

へたり込むように座る先輩を
見下ろすような格好になる。
普段なら、外出しの際は、
ペニスから精液を綺麗に舐め取ってくるのだが、
流石の先輩もそんな気力は残っていないようだ。

